

環・太田川

2001年8月 酷暑号



目次

小林一彦の あしたはどっちだ?!	2
吉野川から太田川のアスを考えよう	4
この木の叫びが聞こえますか	7
インタビューシリーズ	
100%クリーン こちら夢中力発電所	10
太田川の魚	12
絵画・写真で蘇る太田川	13
投稿コーナー	14
瀬 音	15
いっしょにやります専科	16
「環・太田川」ホームページより.....	17
環KAN学GAKU	18
みずべの図書館・インフォメーション	20
(オヤ?ニラミはお休みします)	

その朝そのとき私たち母子三人は
白島の家の前に立っていた。

巨大な火の玉が落ちた瞬間妹を抱
いていた母は首から背中を焼かれ、
私は

(ある被爆体験) 関連7ページ

ブラリスト小林一彦の

あしたはどっちだ?!

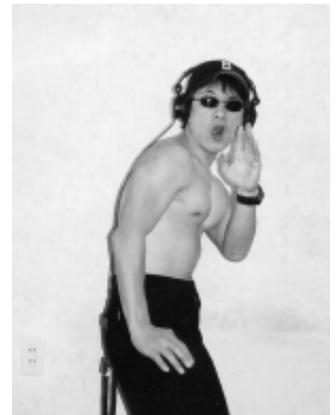
俺様は、週末流牧民。

最初の遠出は、中学2年の夏の終わり、南区の自宅からクラスの悪ガキ3人で出かけた土師ダムまでのサイクリングだった。朝は暗いうちから出発し、向原峠では上り坂にヒイヒイ喘ぎ、下り坂では逆に、ブレーキが壊れるほどスピードが出過ぎてデブのツボッチが崖下に転落(デブだから加速がついたのだ)。ツボッチは岩の出っ張りに引っ掛かって奇跡的にも無傷。吹っ飛んだツボッチの自転車とメガネを拾い上げようと崖下の草むらに飛び下りたら、そこを根城としていたスズメバチの大軍に襲われ、ヤバイ! どうにもならん! と、助けを求めて呼び出した吉田署のポリさんもスズメバチの逆襲を受け3箇所刺されてノックアウト、救急車に担ぎ込まれる騒ぎに発展(このてん末は、翌日の中国新聞夕刊にも載った!)。とにかく、散々な目に逢いながら土師ダムにゴールしたのは、昼をかなり過ぎたあたり。みんな、汗や泥にまみれ、顔も服も自転車もボロボロ。湖畔の駐車場に車座になってしゃがみ、リュックから取り出した大ぶりのナシにむしゃぶりつきながら、道中のハブニングを笑い飛ばす。俺達はほんまに自力でここまで来たんじゃないの、スゴイことやったの、明日学校でイバれるの、とこころでポリさん大丈夫かのう... 初めての大胆冒険に心ときめき、

ちょっとだけオトナになったような気がした。まさにスタンド・バイ・ミーである。家に帰りついたのはいつたか何時になったのか思い出せないが、今となってみれば、あの時の達成感というのが、すべての力を出し切ったことで得られる恍惚感が、その後の俺を未知のフィールドへ度々誘い出す呼び水となっているように思う。

高校生になってからは長距離用の自転車を手に入れた、週末ごとに東へ西へ。バイクやクルマの免許を取ってからはさらに行動範囲が広がっていく。そして30才を過ぎてから出会ったのがシーカヤック、海の長距離力ヌーである。普通、パリ・ダカールラリーで見ると、大平原を旅したいと思っても、国内ではそんな場所、ありやあせん。だが、シーカヤックに乗り込めば瀬戸内海でもその感覚が味わえてしまうからヤメられんです。つまり、水在るところ、すべて道。たとえば広島市西区の観音マリーナから2人乗りのシーカヤックで出航するでしょう。指をしゃぶって風にかざし、「よし、今日は風向きがいいから宮島まで行こうか」てなキザなセリフが吐けるのだ。シーカヤックは目線が低いので、瀬戸内海でさえ地球の丸いのがわかる。無人の荒野をさすうらう心境。大

型・小型船舶の専用航路は避けたほうが無難だが、基本的にシーカヤックはフリー、どこを漕いでもいい。船舶免許のように、級による航行海里の制限もない。ついでに燃料も不要、いや、俺達の場合はビールが燃料か。宮島までの片道13kmなら、ハッチから取り出したビール飲みつつダラダラ漕いで、だいたい2時間で行けてしまう。途中、海上で出会った大型ヨットやクルーザーのクルーが、ゴキゲンに漕ぎ進む俺達を見てブツたまげ、「あんたら、どっから来たんかいの?! まあ、こっちはあがってビールでも飲みながら話を聞かせんさいや」と、無理矢理(?) 宮島に上陸して弁当を食い、またカヤックに乗り込み、周辺の無人島を散策していると、水平線の彼方にキラリ光る物体。近付くと同じくシーカヤック乗りだ。挨拶を交わし、ついでに互いの航海の安全を祈って、ビールで乾杯(またビールだ!)。ところで最近が高齢者のシーカヤッカーが増えて来た。定年退職してから始めたという人にも何人も出会った。そう、それほどまでにシーカヤックはジー。筋力も運動神経も持久力もさほど必要なく、老人でも女性でも、手軽にロンサムカウボーイを気取れるフリーダムマシ、それがシーカヤックなのだ。



夏に向けてますます絶好調。
本日も、反省の色ナシ!



ブラリスト小林のお気に入りスポット。宮島青海苔浦にある、某清流の河口にて。この川は宮島で唯一、野生のアユが棲んでいるらしい。干潮時には河口の入り江が消滅し、海から入ることは出来ない。

なのに、この面白さを知る人のなんと少ないことか。だいたい地球の2/3が海。海を入れると日本は決して狭くないのだ。もっと愛好者が増えたらいい。待ちに待った週末、シーカヤックに水や食糧、テントなど必要最小限の荷(といっても俺のシーカヤックの最大積載量は280kgまでOK)を積み、日中、きままなクルーズを楽しんでから、夜は気に入った無人島のビーチに上陸し、テントを張り、火を起こし、メシを炊き、潮騒をBGMにビールをグビリ(一体、何本飲んでいるのでせう)。もう、仕事がなんじゃっちゅうんじゃ。不景気がなんぼのもんじゃい。対人関係とか、将来の不安だとか、IT革命とかそんなもん、ハアどうでもエエわい(オンナなんかもどうでもエエ!なんてことだけは俺の場合決して思わないが)。とにかく、気分良すぎて世間の皆様に申し訳ない!と喚きたくなるほどナチュラルハイだ。

肩の力がスツと抜ける。頑なだった心が解きほぐされ、風になびいていく。体の中の澱が少しづつ消えていく。自然に笑みがこぼれてくる。そのとき、ふと気付くのだ、そうか、人間生きていくのに必要なものなんて、そんなにいらんんだ、と。精神レベルがこの段階まで達すると、世間のウソがじんわり見えてくるから不思議。狂い流れるこの国は、どこへ向かおうとしているのだろうか。まだ「足りない」のか。豊かすぎてなんだ。この国の住人は、自然をどこまで痛めつければ気がすむのか。だいたい原発のどかがクリンなんじゃい。まかり間違えば膨大な数の人々を死に至らしめる高レベル放射性廃棄物を出しておきながら、CO₂を排出してないから地球にやさしいとは、厚かましいにもほどがある...などと寄せては返す波のごとく、とりとめのないスピリチュアルメッセージが脳裏に去来し、やがてだんだん眠くなってくる。ふああ、ぼちぼち寝るとするか。あ、そうそう、石垣博士こと、佐々木卓也サンに聞いたところによると、太古の昔、太田川の河口は、なんと今の豊後水道あたりだったらしいのだ。でつけえハナシだナア。太田川って、大河だったんだナア。これから先、どうなっていくんじやる、、、よおし、俺にまかせとけ?!

P.S. シーカヤックに興味のある方は、ブラリスト小林までお気軽にご連絡ください。どなたさまも洗脳して差し上げます。

吉野川から太田川のを考えよう

「姫野 雅義さん七夕トーク イン広島」開催しました



姫野 雅義さん
吉野川シンポジウム実行委員会
第十堰住民投票の会
代表世話人

2001年の七夕は、古より伝わる織り姫、彦星の天上での出会いに、もう一つの新たな出会いが加わりました。それは、広島というデルタの娑婆で体感することのできた素晴らしい出会いでした。瀬戸内海を遙か隔てた吉野川の下流域で生まれ、育ち、住み続ける姫野さんと、太田川の流域に住む私たちの出会いでした。

プロローグ

「吉野川から太田川の明日を考えよう」と銘打った七夕講演会は、今年の五月に「環・太田川」が創刊されて最初の学習会になりました。

講演会に先立つ五月下旬、姫野さんとお会いして打合せをするために私は徳島へ行きました。資料を送ったり、電話での打ち合わせもしていたのですが、やはり直接お会いすることが大切です。「環・太田川」を創刊するまでに、およそ二年間の準備を要しましたが、特に創刊までの一年間は、毎月の学習定例準備会への講師として太田川に関する様々な分野の方々にお話ししてお話をして頂きました。その時は、事前に必ずお会いしてこちらの趣旨をお話ししてお願いすることを原則としていました。いまやインターネットやメールの時代といわれる今日において、何故、そんな原則を大切に

にしたかと言えは、出会の三原則があると信じたからです。一つには、出会った時の呼

吸を五感(官)で感じとり、一つには場の空気を共有することで気合の程度を認識し、一つには云々と言葉を交す事によって関係の基本がはじめて成立することが大切だと考えるからです。インターネットやメールなど、バーチャルな手段が普及すればするほど、逆に、出会いのはじまりは、出会いの三原則のリアリテイから出発して豊にふくらんでゆくことが大切だと考えるからです。そのような思いで徳島へ行きました。

休日なので、御本人以外は誰もいない姫野司法書士事務所へ入ると、昔の大きな和文タイプライターが目飛び込んで来ました。それも骨董趣味ではなく、今も大切に活用されていると聞いて驚きと同時に嬉しくなりました。椅子に腰かけて美味しいコーヒーを頂きながら、姫野さんの息づかい(呼吸)と心づかいを感じ、古い和文タイプライターのある事務所の空気を共有することと気の合うことを充分に期待しつつ、打ち合わせの云々に入って言葉を交わしました。人と人が云云交わす事が文字通り出会う事だと気がつかれます。と思いつつ、こちらの思いが充分に伝わったかどうかは別にして、姫野さんの思いは十二分に伝わってきました。事務的な話しも了解しあった後、広島での再開を楽しみに事務所を後にしました。

吉野川は中流域がほとんど手つかずで景観が良いと姫野さんに聞いたので、帰りは池田町まで中流域を走り、そこから瀬戸内に出ることにします。まず、吉野川の河口に出ました。そこは河口というよりは、広い湖がまるで海のようにでした。この川が、

この国の河川の中で河口幅が一番広いということに頷いたのでした。堤防の道を河口から4~5kmでしようか遡った所に、昔第十村と言われた地名があり、そこに第十堰はありました。第十堰とは数でなく、地名についた名前なのです。河川敷においてその堰に近づいてみました。長さは1km近くあるのでしょうか？その堰はこれが堰と言えるのかと思えるほどなだらかな勾配で、雄大な吉野川の自然にすつかり溶け込、長良川や諫早湾などの、それまで私が知る可動堰とはその姿、形からして全く異なるものでした。

第十堰は約250年前に石を積み上げながら、流れを斜めに遮る工法で今のよう形に造られたそうですが、現在は原型をそのままに、コンクリートやテトラポッドで補強しており、何ヶ所か水路(魚道)が切っておりあります。堰の上を歩いてそこへ近づくと、鮎の稚魚たちが銀鱗を輝かせながら懸命に遡上していました。なだらかな堰の下の方へ行くと石の間からそこそこ水が流れていてゴリやカニが戯れて、それを狙う水鳥たちが飛びかかっていました。また、水辺に生えたヨシなどの茂みから、いく種類もの鳥のさえずりが聞こえてきました。このような豊かで雄大な自然の中に、何の違和感もなくスッポリと収まっている第十堰の姿に、ウットリと見とれてみると、突然かつて見た、諫早湾にそびえ立つ異物のような可動堰の光景が想念の中でコントラストのように映像化され、一気に天上の天国のような気分から、地上の現実に戻されてしまいました。それにしても、先人たちの知恵と技術が作り出した第十堰の姿には畏敬の



吉野川第十堰

念を抱かずにはおれませんでした。
 吉野川は、中流域も近代的な護岸工事がほとんどされていないという事を姫野さんから聞いていたので、第十堰から池田町までのおよそ40キロメートルを川沿いに走ったのですが、まさしく美しい自然の残された豊かな川でした。途中、国土交通省の河川工事事務所の資料館があったので立ち寄って見ると、吉野川全体の資料の中で第十堰と可動堰計画に関する資料があまりに多いのには驚かされました。内容も、第十堰が危険な飲んで可動堰が必要という資料の量の多さと周到ぶりには目を見張るものがありました。その事だけをのぞいて見ても、住民投票が実施されるまでの吉野川流域住民と国との攻防のものです。吉野川は、かつて自民党から共産党まで全

会一致で可決された時期があります。それにもかかわらず、後に徳島方式と呼ばれる住民投票を、推進側の様々な妨害をハネのけてこの国ではじめての公共事業に対する住民投票として実現し、第十堰 Yes、可動堰 No という投票結果を出しました。それでもまだ予断は許されぬようです。
 ともあれ、姫野さんと吉野川の雄大なエネルギを頂いて広島に帰り、七夕トークイン広島を無事迎え、姫野さんと再会することができました。

七夕さんは私たちに大切なことを教えてくれた

前置きが長くなってしまいました。さて、七夕の日にアステールプラザで開かれた講演は、姫野さんと吉野川のかかわりから始まりました。

七夕さんは私

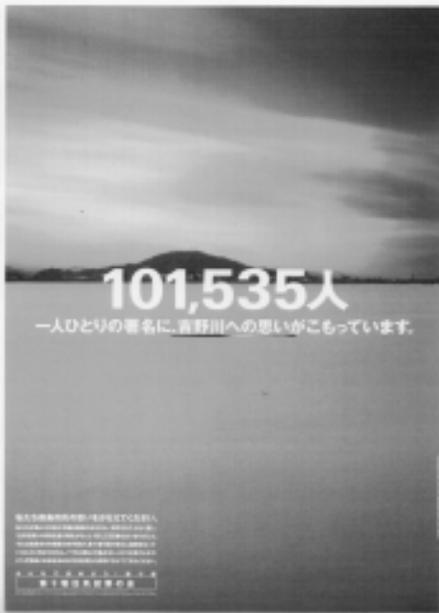
吉野川のすぐそばで生まれた姫野さんにとって、その川は子供の頃からかけがえない豊かで美しい川だったそうです。ところが、その大切な川が、1950年代後半から60年代にかけて姿を変えられていくのを目の当たりにします。それは高度経済成長期の土木建築用材としての川底の浚渫と、上流域に建設されたダムの影響による激しい変化、破壊です。この破壊を目の当たりにした姫野さんは、何かを言わずにはおられない衝動に駆られたそうです。時は流れ、バブル期に入り、1987年リゾート法（保養地整備事業法）の成立で、バブルに拍車がかかり、全国的に乱開発が問題に

なっていく時代になります。それでも吉野川ではそのような目に余る開発はなく、静かな暮らしがあったそうです。

ところが85年に第十堰改築事業計画というのが、当時の市議会で自民党から共産党まで全会一致で承認されました。最初は、文字通りただの第十堰の改築と想っていた事業内容が、やがて明らかになるにつれ、長良川のような可動堰を、別に建設する計画である事が分かりました。日頃釣りなどで川に親しんでいた姫野さんはその事実に大変驚き、およそ6年前に釣り仲間との取り組みから始まったそうです。取り組み始めると、あまりにも情報が公開されていない現実、そのことから住民の側が何も知らされていない大きな現実の壁に突き当たります。

そこで国や行政に対しては何度も何度も足を運び、今のように情報公開法が制定されていない時代にあつて徹底した情報公開を求め、一人でも多くの流域住民にこの事を知らせ、考え、判断してもらい、住民自身が参加して決定する住民投票への実現に向けた様々な創意工夫に充ちた取り組みが始まります。実はここからが、普通の住民運動との大きな違いの始まりになるのです。

それは反対派、賛成派といった色分けをせず、主張の押しつけではな



住民投票実現を願うポスター

く、一人一人がじっくりと考える事の大切さを説き、第十堰の必要性に熱心な人や団体には一歩引いてもらい、むしろそうでない人が前面に出ることが出来るような取り組みにして、あらゆる組織、団体との関係は等距離にし、決起集会やデモなどは一切やらなかったそうです。そのかわり、野田知佑や椎名誠などの著名人にボランティアでしっかりと来てもらい、川に親しめるイベントを何回も催し、吉野川の良さを訴えつつも可動堰への反対は一切言わないようにしたそうです。更にお盆や正月に里帰りして来る人へもこまめにアンケートを実施して広く世論の喚起に努め、多くの人に手渡す資料も国のパンフに赤ペンを入れて作成し、同じテーブルを囲んで話し合おうとシンポジウムを開催し、国への参加も求めます。ただ、国が参加してきたのはその呼びかけから二年半たってからだそうです。それでも実際にキメのこまかい配慮に富んだ心づかいに満ちた住民運動が展開された事に感心

劫火を逃れた人人で 中洲は埋まった

あの日

太田川が市街地に入って京橋川と別れる所に中洲がある。こんもり樹が繁って鳥が群れている。かつてこの中洲は今よりずっと大きな砂地だった。1945年8月6日、この中洲は劫火を逃れて川を渡った人で溢れた。行き場を失った人々はここで恐怖の一夜を明かした。いや、その俣ここで果てた人もあった。



滝口秀隆さんの

被爆体験と写真制作

その朝、家の前に立っていた私は一瞬の爆風に吹き飛ばされて井戸の端に頭を打ちつけ、気を失ったらしい。私の肩を揺すりながら名前を呼びつづける母の声で気がついた。当時はまだ5歳であったつえ、頭を打ったためか前後の記憶が途切れ途切れである。

ともかく火を避けるのに川の中洲が安全だと考えたのである。母は1歳の妹を抱き、私の手を引いて川へ入った。突然激しい痛み、左足がひどい火傷を負っていて、川の水が浸みて痛むのだった。足だけではない。左の腕から手の甲、指までもひどい火傷だ。それでもとにかく川を渡らねばならない。母の首から背中も焼けただれて皮膚がさがっているのが見えた。

中洲はすでに避難している同じ白鳥の人達で溢れていた。火もここまでは燃えて来ないだろう。しかしこれからどうすればいいのだろう。いろんなものが空から降ってくる中で不安な夜を明かしたのだが、私たち三人がどのようにして過ごしたのか、食べ物が入ったのか、などその時のことはほとんど記憶していない。

母の里へ帰る

ともかく翌日か或は翌々日か、私たちは母の里の松永に落ち着くことができた。広島に

聞こえますか は訴える――



広島城内のユーカリ。(滝口さん撮影の右の写真)は二の丸跡の内堀に寄って立つ爆心から740メートル。被爆して生きている木としては最も爆心に近い木である。木の南側を激しく焼かれ、内部は黒い空洞となりながら、その反対側から芽を吹き出し、さらにその後の台風(71年)によって樹幹を折られ、なおその下から幹を蘇生させ、枝を出し、しゃにむに生きようとする強烈な闘争心のようなものに圧倒される

大型爆弾が落ちたという情報を聞き、心配した伯父が捜しに来てくれたのに出会うことができたのである。また、当時軍隊で島根県に駐留していた父も、広島爆撃のニュースが入って一時帰省を許され帰ってきて、会うことができた。幸運が重なった。

しかし、私たちの火傷はひどいものだった。特に母の背中は大だれて、ウジがわいて、髪の毛もどんでん抜けていった。何日か苦しんだあけく、暗いところへ落ちていく・・・と言いながらこと切れた。もう駄目か、と、みんな思ったらしい。ところが、不思議にも数時間後に母は蘇生した。生命力の強さというべきか、全く奇跡的に生きかえった。

それに対して妹の方は暫くたってから病状が悪化してきて、三カ月後に亡くなった・・・このころは思い出したくない・・・妹は母と私の死神をひとりで背負って逝ったのではないかと、思うことがある。母と私とはその後、火傷の治療を除いては、いわゆる原爆症の症状は全く出て来ない元気な身体でいるからである。

辛かったケロイドの青春期

一年後、私たちは白島にもどり、焼け跡にバラック住居を建て生活を始めた。小学校へ行くようになってからの私の最大の悩みは火傷だった。左手首から指にかけては特にひどく、当時はほとんど治療らしい治療が受けられなかったことで、手首の皮膚はぶくれ上がり、冬にはそれがひび割れて痛んだ。

白島小学校から幟町中学校へ進んで、思春期になると、手の痛み以上に心の痛みをいっそう強く感じ



この叫びが

被爆樹木

それは、口に平和を唱えながら一方で過去の過ちを正当化しようとしたり、核兵器の存在に追従したりする人間に対して、猛烈な無言の叫びを発しているように見えて、思わずはっとさせられる。

左は千田小学校のクスノキ。千田小学校にはクスノキのほかにも被爆樹木がたくさんあるが、これらはすべて移植された木でどこで被爆したのか記録が残っていない。熱線を受けた跡はありありと見える。

るようになった。他にも被爆者はいただろうに、こんな火傷のある生徒はなぜか他にいなかったこともあって、いつも人から見られているようなコンプレックスを感じていた。

「どうして戦争なんかしたんだろう・・・」

どうして自分はこんな目にあわねばならないのか・・・」

しばしばそんなことを考え、自分の中に閉じこもりがちな青春期だった。当時の日本の整形外科は随分遅れていたのだが、やっと高校三年になって手術を試みたら・・・という医師の勧めを受けた。腹部の皮膚を手首に移植するもので、経過は良かった。しかし腕と足のケロイドは生涯消えることはないだろう。*以上、滝口秀隆さんよりの聞き書き

ヒロシマの心を

写真を通してヒロシマの心を訴えたい。自分の原体験とそれにつながる少年時代の思い出。そして薄幸な妹への哀悼。それらが滝口さんにヒロシマをテーマとした制作を続けさせるようになった。「1977・広島・夏」を発表した時には大倉舜二渡辺勉、篠山紀信ら第一線の写真家から高い評価を受けた(表紙写真など)。その後リアリズム写真集団の一員として活動。93年には「被爆して生きる樹たち」を発表。この中で力強く生きる木の生命力を通して、滝口さん自身の凝縮したイメージを見ることができる。

滝口秀隆さん現在安佐南区在住、61歳

ねばりづよく地方の言葉を発信していきたい

インタビュー 100%クリーン
シリーズ

こちら夢中力発電所！！

アールネット ポラン

小田豊隆 さん

このコーナーでは、「こんなふうに変わっていかんかのう。こうなったらええのう。」といろんなことに取り組まれているグループや個人の方にインタビューします。今回は、間伐材を利用する木工会社にお勤めの傍ら環境問題専門のインターネット古本屋「アールネットポラン」をオープン、同時にメールマガジン「ポランの星」とホームページ「がんばろう可部線」を発信しておられる、加計町在住の小田 豊隆さんにかがいました。

地域の大きな課題として山の問題がある

間伐材を利用する木工会社で働いておられますが、やはり山の現状に対する問題意識からお仕事を選ばれたのですか？

「私は4年前にふるさとである加計に帰ってきました。もともと木工には興味があったて、家具などを作る指物木工の技術を学べる仕事をしたかったと思っていました。希望にマッチした職場をほうぼう探して、現在の仕事場（鳥根県那賀郡金城町）に出会うことができました。私の仕事場は「間伐材を利用することで、間伐を促して山の荒廃を防ぎたい」という理念からスタートしています。私が暮らしている加計を含めて、現在中山間地が抱える大きな問題として、手入れのされない人工林の問題があります。いま通っている仕事場は地元の加計から離れてはいるんですが、西中国山地という広い視点で見るとき、共通の課題を抱えている同じ現地で働いているという思いはあります。」

国内唯一？の環境問題専門のインターネット古本屋

お仕事の傍ら、インターネットで、自然環境問題や社会環境問題に関わる古本屋「アールネットポラン」を開いておられます。

「環境問題専門のインターネットの古本屋は、いまのところ国内では『アールネット

ポラン』だけだと思います。インターネットには危険な側面もあることは認めますが、個人で、都市部から離れた地域から情報を発信していくとなると大きな武器になることも事実です。以前から原発の問題に関わっていたので、より多くの方々と、原発の問題などいような問題をいっしょに考えていくスペースを作りたいな、と思ってました。一時期古本屋（店舗）をやっていたこともあるので、ネット上で環境問題専門の古本屋を核にして、メールマガジンやホームページと組み合わせた情報発信スペースを作ろうと思いい立ちました。『アールネットポラン』では、原発に替わる自然エネルギーの問題についても考えようと、ソーラーグッズも取り扱っています。」

現場からの生の声を発信したい

「アールネットポラン」と並行する形で、メールマガジン「ポランの星」をほぼ週間で発行しておられます。その「ポランの星」の最近の記事では、地域材の利用現場で働かれる中で感じられた問題を詳しく論じておられますが、ひとくちに「間伐材の利用による間伐の促進」といっても、いろいろな難しい問題を孕んでいるようですね。

「詳しいことは、『ポランの星』を読んで頂きたいのですが、そもそも間伐とは、主に建築材料として価値のある木材（大径木、中径木）を生産するために適正本数を維持することで、野菜でいえば『間引き』に相当します。昔はそうして伐られた木

インターネット専門古本屋
アールネット ポラン

ポラン壁新聞(初めて訪れた方はここを見てください)

Friendly Polan
=ポイント・システムについて=

「だからほくらはほくらの手でこれからそれを持えようではないか。」
「そうだなんな単独な、みつももないわざとしぶんをこまかすような
そんなポラーノの広場でなく、そこへ夜行って歌えば、またそこで
風を吸えばもう元気がついてあしたの仕事からさだいつば



小田 豊隆さん

「ボランの星」では、毎号宮沢賢治さんの詩を、時候に合わせて紹介しております。

「ええ。賢治が好きということもありますが、『アールネット ボラン』という店名は、賢治の『ボラーノの広場』から拝借したものです。皆で力を併せて新しい協働の場を創り出そうとするファゼーロたちの願いは、賢治自身の願いでもあり、私自身の願いでもあるからです。」

可部線を主体的に応援しよう

小田さんは「がんばろう可部線」というホームページも立ち上げておられます。可部線対策協議会の「がんばれ」という表現を少し変えて、「がんばろう」という言葉を使っておられることになにかメッセージを感じますが…

「がんばれ」という表現だと、ちょっと他人事みたいな語感があります。可部線の問題を自分自身の問題として引き寄せ、主体的に関わろうよ、という願いから「がんばろう」というネーミングにしました。可部線の問題は、山の問題、原発の問題と、決してかけ離れた事ではないと思います。地方や中山間地の切り捨てという共通の構造から生まれた問題ではないでしょうか。」

ホームページに寄せられるご意見にはどんなものがありますか？

「好意的なご意見が多いのですが、なかには『可部 三段峡間は廃止した方がよい』というご意見も頂きます。現在の可部線は都市側の負担によって運営されている、なぜ都市が赤字ローカル線の犠牲にならないかな、そういうご意見ですが、それは自分のところさえよければそれでいい、という考え方ではないでしょうか。でも今のやり方で廃線を許したら、JRの一本の路線中でも赤字の区間だけ廃止すればいい、一本の線路を分断してもいい、ということになりかねませんよ。」

ねばりつよく地方切り捨ての論理に異議を唱えたい

これからのご活動について、何を考えますか。

「都市から離れていると、実はインターネットへの接続環境なども決してよくはないんです。そんななかでも粘り強く、山の問題や可部線の問題など、地域の問題を発信しつつつけていきたいと思えます。発信しつづけることで、もう一段乗り越えた、地域の言葉、地方の言葉を発信できるようにされるんじゃないか、そんな希望を持っています。」

最後にメッセージをお願いします。

「本の仕入れが結構大変です。量販店よりはましな(笑)値段で買い取りますので、よろしくお願ひします。機会があれば、各サイトをのぞいてみてください。メールマガジンは、『アールネット ボラン』のホームページから登録可能(購読無料)です。」

アドレス:
「アールネット ボラン」
<http://www.r-polan.com>
「がんばろう可部線」
<http://www5a.biglobe.ne.jp/~kabeline/>

広島県西北部を走るローカル線 JR可部線の可部～三段峡間の廃止が表明されて3年目を迎えました。試験増便も再開され存続運動はいよいよ正念場を迎えます。

私たちの共有財産である JR可部線、そして全てのローカル線を残していく道を皆で考えましょう。



がんばろう 可部線

インタビュー 2001年7月22日
インタビューアー 原 哲之

連載

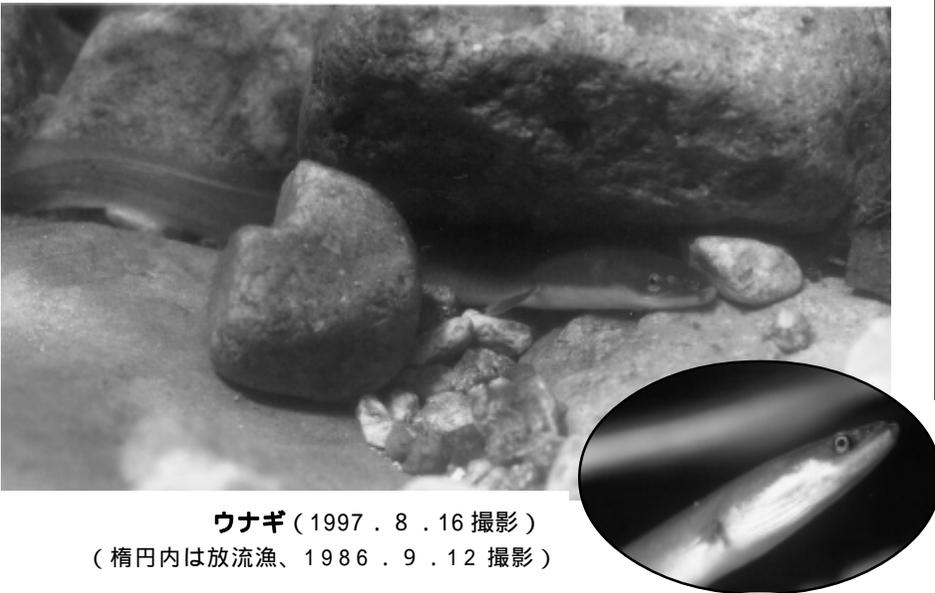
太田川水系の生き物たち

天然魚の遡上が激減した

日本全国に分布

し、河川の上下流域・湖沼を問わず生息します。大きさは約60cm、大きなものは1mを超え、腕の太さぐらゐのもいます。形や体色や味覚によって「ごま・がくい・まお」などと呼ばれることがありますが、すべて同種です。

繁殖場所は琉球列島南方海域と考えられています。ふ化した仔魚は葉形幼生（レプトセファルス）と呼ばれ、大きさは約10cmです。柳の葉の形に似ており、無色半透明で



ウナギ (1997. 8. 16 撮影)

(楢円内は放流漁、1986. 9. 12 撮影)

扁平、ほとんど遊泳力をもたないため、海流や潮流に身をまかせ漂流を続けながら四国や九州の太平洋岸にたどり着きます。直前には変態して「針うなぎ」になり、黒い色素を持つようになります。この針うなぎは一合が数拾万円もする貴重な水産資源です。これを浜名湖などの養殖施設に運び、成長させたものが養殖うなぎです。最近では外国産の種苗も移入されており、「味が違う」と指摘されることもあるようです。養殖うなぎといつても完全養殖ができない魚類なのです。

私たちがこどもの頃、川で遊んでいると6〜8月頃に6〜7cmの「針うなぎ・糸うなぎ」が遡上してきたものですが、現在はほとんど見ることができません。海が汚れたのか、潮流が変化したのか、河口域の汚染が原因なのかはよく解りませんが、

太田川水系でも、近年、海から遡上する天然個体が少なくなつたため、四国や九州で採捕された針うなぎを一次貯養して放流をしています。

ウナギは漬け針やうなぎ籠で漁獲されますが、子どもにはなかなか捕まえることができる魚ではありません。子ども頃の頃、夏季にはドジョウを餌に、石垣の隙間に釣り針を差し込んで、ウナギを捕らえる光景がしばしば見られました。現在はそうした光景も見ることができなくなりました。護岸がコンクリート化されて住みかが少なくなつたり、川に堰やダムができたために遡上・降海が十分行えなくなつたことに原因があるように思えます。太田川の支流である柴木川の三段峡では、幼魚の滝のほりが記録してありますが、このことからダムや堰ができる以前には最上流域まで多くの個体が太田川を遡上していたことが推測されます。ウナギは海と川を一往復して一生を終える両側回遊魚なのです。

川野 守生

写真・絵画で蘇る太田川

その四 ガソリン中毒



交通運輸の近代化はまず県道の整備から始まる。太田川上流筋では明治20年代の終わり、九尺道がついて荷車の出現となる。その後、二輪馬車、続いて四輪馬車の活躍の時代になる。宇佐（現在湯木町）で飲食店をやっていた明治40年生まれの主人の記憶では、大正初年ごろはまだ荷車や二輪馬車だけでなく、馬の背に米俵を2俵振り分けにして運ぶ人達もいたと言う。当時のドライブ・インでは人の飯や酒の他に馬の飼料も準備されていた。

x x x

昭和4、5年からこの地方でも貨物自動車を使う人が出てきた。出口で運送を始めた上原熊一氏が最初に手に入れた車はフォードの1トン積みで、4輪ともソリットタイヤ（ノーパン）であった。チューブのないタイヤだからパンクすることはないが、大変な振動で走った。運転手も助手も雇い人だった。当時の自動車ではエンジンの始動の際、スターチングと呼ぶレバーを助手が手で廻して掛けるのだが、反動があつて危険なものだった。この助手もスターチングに失敗して腕を折つてやめてし

まった。熊一氏の2台目の車はシボレーの2トン積みで当時の花形だったから早速親戚や近所の人が集まって、牛まで並べて記念写真を撮った。この頃になって熊一氏の息子たちも免許をとって運転できるようになった。

+ + +

写真は3台目で、やっと国産車が出回るようになったのでトヨタの2トン積みを購入した。3人の人物は右端が熊一氏、左端は息子で運転手の守君、中央は雇いの助手である。昭和十年代から廿年代にかけての若い運転手の服装はみんなこうした詰め襟服に帽子で、この帽子をほんの少しだけ斜めに被る。トラックもバスもこれが運転手の誇りあるスタイルだった。彼らは運転技術の優劣に関らず村の娘の熱い視線を浴びた。中でも特にぞつこん運氏に惚れこんだ娘は、廻りの者から陰でこんなことを言われたものである。

「あの子、ガソリン中毒にか

かつとるんじゃげな・・・」

ガソリン中毒の娘が各地にいたのは昭和廿年代までであつたらうか・・・

（幸田）

投稿

(編集部)

現在広島県が、出島沖埋立地に産業廃棄物最終処分場を建設しようと計画しています。この計画に反対しておられる地元の方々が、「さんぱい通信」を送ってくださいました(7月7日に開催された姫野雅義さんの講演会に参加されました)。

私たちの生活は、普段家庭で出している一般廃棄物だけでなく、その十倍近いともいわれる大量の産業廃棄物を排出しながら成り立っています。出島沖の問題は、その近くに住んでいなくても、自分たちの問題として考えなければならぬことなのではないでしょうか。

さんぱい通信 No.1

平成13年7月14日

ベイサイドパレス管理組合 情報連絡会

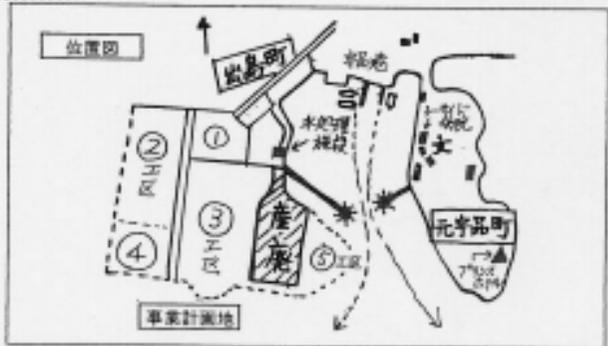


◆ 知っていますか？

広島港入口に産業処分場が計画されています。

◆ どんな計画なの？

位置図に示す⑤工区の1画18haの埋立用材を安全な土(公共残土や浚渫土)から産業廃棄物の埋立に計画を変更しました。



◆ 埋め立て計画地は？

広島港入口にあたり、赤と白の灯台がたたずむ波止場に隣接します。500m先には特別保護地区で原生林を有する元宇品があります。ダイオキシンなど有害物質による被害への心配があるにもかかわらず、地元の住民に知らされたのは今年(2001年)の2月でした。

◆ 産業が運び込まれるのはいつからいつまで？

護岸の工事 ⇒ 平成 14年 ~ 17年 予定
 産業投入 ⇒ 平成 18年 ~ 28年 予定



- * 平成18年投入開始予定だが、現在五日市処分場が、ほぼ満杯の為投入時期が早まるであろう。
- * 平成28年投入完了予定だが、県はゴミを年間25%減らす計画があり、投入時期が20年? 30年? 40年になるかもしれない。



◆ 産業廃棄物って どんなもの？

産業廃棄物 6種

* 印は安全ではない物と思われる

* 焼え殻	完全に燃えていない物はダイオキシン等有害物質を含んでいる
* ばいじん	「すす」に沢山の有害物質を含んでいる 飛散しやすい
* 汚泥	臭いがあったり、有害物質を含んでいる
* 鉛さい	製鉄の時に出る非金属性カス 有害物質を含み 飛散する
* がれき類	建物を壊した時に出る物 発ガン性物質(アスベスト)が含まれる事がある
ガラス・陶磁器くず	瓦、レンガも含む



瀬音

川端からこんにちは

所構わず川端にあらわれて、出会った方に川にまつわるお話をうかがうこのコーナー。

前回に引き続き、「根の谷川のもと河童さん（おん年75歳）」のお話です。

根

根の谷川は、三人の辺は浅いんじやが、わしがあつた深入（シンニユウ）は、二、三百メートルの間深うて、よどみがあつて、グーッとカーブして、淵があつて、かたや断崖、かたや竹やぶで、魚の宝庫じゃつた。わしらがこまい頃は、なんか「集まれ」言うたら川へ集まることで、みんな深入へ集まりよつた。別にしつらえたわけじやないが、河川敷が広うて、そこが遊び場じゃつた。

川には大きな岩があつて、その底がえぐれとつて、そこに魚がある。「げんのう」の大きいのを担いで川に行つて、石をなぐつて魚がしびれたところを捕りよつた。バケツに二、三杯はすぐ捕れよつた。アユは太田川の方が多いうて、中島の先の翠香園の沖がすこかつたよ。マスの類も、根の谷川におつたのはおつたが、ようけはおらんんだ。いろんな魚があつて、いっぺん、海で言うたらカマスそっくりの、歯が鋭い魚をみたことがあるんじや

が、ありやなんじやつたんかいのう。それからカジカ、わしらは「ダンギ」いうて言いよつたんじやが、道の上からもあるのが見えよつた。今はおらんですが、これはおいしい魚じゃつた。

わしらが子ども頃は、川の水を飲めるぐらいいきれいじゃつたけえ、ほとんど川の水をそのまま使いよつた。風呂の水は根の谷川の水じゃつた。風呂を炊きよつたら、風呂桶の中にフナの子や泥鰌が入つとつて、かわいそうじやけえいうて川に戻してやりよつたですよ。

わしらは広島市内の方へも潮干狩りとか、泳ぎに行きよつた。猿猴川はいまでこそものすごく汚いが、昔は川泳ぎ

わしや根の谷川の河童よそのい

そのい

が、横川辺りに長いことあつて、それからいまこの長束におります。その間ずっと、目が回るような街や川の移り変わりをみてきました。

戦後すぐ、横川から楠木にかけて川つぶち全部製材所と材木置き場じゃつた。今はマンションになつとりますが、あそこは昔から木場じゃつた。わしが広島に来た昭和25年ごろも木場で、車がまだなかなか手に入らんかつたけえ、馬車でも入りましたですよ。今基町の市営アパートが建つてるところは元練兵場で、あそこに木造の一戸建ての市営住宅が何百いうて建つとつた。戦後廃墟になつて、すぐにはコンクリーの家は建たんから、加

のメツカじやつた。あそこ相生橋、あの辺が盛んじやつた。向洋のあたりもよかつたでー。太田川も深かつて、梅林の沖ぐらいで十メートルぐらいいあつた、八丈岩のところが一番深うて、二十メートル近くあつたんじやないですか。

計の方の木がそりやあたくさん伐り出されて使われたですよ。伐つたあとに、国がスギやヒノキばかり、よく植えさせたんじやろ。

話

話はころつとかわつて、わしは戦時中から広島市内に出ました。不幸中の幸いで原爆にはおつとらんです

でじやね。昭和40年代後期から、外国材に押されて、材木屋さんが倒れたりしだして、木場じゃつた辺はビルが建つようになった。横川の方も、あれからがらつと変わつてしまつた。

わしやあいまは長束に住んどります。この辺から上は、昔太田川が氾濫したときに上から栄養のある土を運んでくれたおかげで、土地が肥沃で、ものを植えたらようてきますよ。でもここらも、祇園新道が出来てから、外国みとうになりましたな。

わしの家の目の前で、太田川から放水路が分かれとる。毎日川を見よつたら川は生きものじゃ思ひますよ。今日なんかはいっぱいに水がありますが、上流の方で調節しとるんかいね。じゃけどなんかこの何年か川の様子がおかしいで。砂の出方も変わつたよ。上の方でなんか起こつとるんかいね。

それにしてもあんたあ、わしの話を聴くんもええが、きりがないでえ。また話したげるけえ、このたびはここで止めときんさいや。よそにもタヌキさんやらキツネさんやらクマさんやら川瀬さんやらいろいろあつてじやるう。



「環・太田川」では、皆さまの活動・取り組みを応援しています。
イベントや活動への参加を呼びかけてください。情報をお待ちしています。
お気軽にお寄せくださいね。

.....

「HEART to HEART」へおいでよ！
ひろしま市民活動ネットワーク
HEART to HEART

ひろしまの街のど真ん中に、「市民活動の、市民活動による、市民活動のための」なんでもスペース、つくりました。

だれかのために役立つ活動をやりたいのだけれど、「どこに行ったら情報があるのかよく分らない」方、市民活動のあらたな出会いや活動の拠点を探しておられる方、「HEART to HEART」へいらっしやいませんか。

「HEART to HEART」は市民活動のための図書室であり、音楽室であり、情報スペースであり、事務局であり、作業場（会議や印刷、発送）であり、夢を語り合う場であり、ぼーっとする場であり、.....、あなたの心の「楽しい」と、だれかの心の「楽しい」がつながる場所です。環境、平和、国際交流、文化、地域づくり、ボランティアなどなど、あなたのやりたいことが何でもできます。みんなが集まることで、また新しい夢が生まれ、その夢の実現に向かって走り出すことができるかも。「楽しいこと」、「自分らしくなること」、「よくなること」がどんどん膨らんでいくでしょう。

「HEART to HEART」は、みんなで運営していくスペースです。会員になっていっしょに活動しませんか？いろいろなかたちの参加があるので、まずのぞいてみてください。もちろん、会員にならなくても、買い物ついでにぶらっと立ち寄るのもよし。「HEART to HEART」で楽しくおしゃべりしませんか？

「ひろしま市民活動ネットワーク HEART to HEART」の場所は、中区大手町1丁目 5 - 31 - 201。デオデオの横の道を本通りに向かって少し歩くと県民文化センターがあります。その手前を原爆ドームの方へ曲がって、1Fにお弁当屋さんがあるビルの2Fです。

月～土曜の午前10時～午後6時OPEN。お待ちしております。

お問い合わせは、TEL & FAX (082) - 543 - 6181

ひろしま市民活動ネットワーク HEART to HEART へ。

いっしょに
ひろしま
専科



HPのロゴです！

「環・太田川」ホームページ掲示板より

いま、「環・太田川」掲示板がおもしろい！！

アクセスできない方のために、ちょっとだけ紹介しちゃいます。

アクセスできる方は、<http://all.at/oitagawa> へGO!

(うまく飛べないときには、

http://hiroshima.cool.ne.jp/kan_oitagawa/top.html へ！)

タイトル: **アユの頭と天然遡上**

投稿者 : イカの骨

登録時間: 2001年7月9日22時38分

先日、釣り仲間から太田川でアユの頭を集めている大学の先生が居ると妙な噂を聞き、俄然興味が湧いて調べてみました。その結果、調査されているのは広島大学生物生産学部の海野徹也助教授で、問い合わせると次のような回答がありました。

アユの頭骨の中にある耳石には微量元素が含まれており、この元素を調べると稚魚の時代に過ごした環境が推察できるそうです。また、耳石には日毎の成長を表す日輪が刻まれており、日輪と元素(ストロンチウム)の量を照合すれば、そのアユがどこで育ったか、つまり天然で生まれ育ったのか、人工あるいは琵琶湖産か区別ができるとのことでした。また調査への協力依頼もあり二つ返事でOKしました。

太田川にも天然遡上があることは高瀬堰などの観察結果から知られていますが、量については何も分かっていません。また、琵琶湖や人工の種苗放流も、最近冷水病という恐ろしい病気で壊滅的な被害を受ける河川が多くなっています。これはある意味で自然からの警告と受けとめております。(開発の進んだ河川ほど冷水病が発生しやすいと発言している学者も居るが原因については不明)

私の夢は元太田川漁協組合長の渡 康磨さんもおっしゃっておられましたが、放流に頼らない天然遡上のアユ釣りです。そのためにはまず、現状を正確に把握しないといけないと思っております。

なお、海野助教授の研究内容は下記にあります。

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/zousyoku/studys.html>

「環・太田川」メーリングリストが新装開店です。より楽チンに

アクセス・書き込みできるようになりましたので、よろびく。

「環・太田川」のメーリングリストができました！

上野@HP 管理人

HP 管理人としてはHPの掲示板に皆さんが書き込んでくださる方がうれしいのですが、ダイアルアップでネットに接続している方にはそれもケッコウ大変。そこで、メーリングリストを作りました。太田川に関することはもちろん、暮らしの中で感じたちょっとした話題など、何でもメールにして送ってしまいましょう。

「物言わぬは腹膨くるるわざなり」とか。

参加の仕方は簡単。「環・太田川」HPのトップページにあるメールアドレス入力欄に自分のメールアドレスを入力して参加ボタンを押すか、事務局宛に「『環・太田川』メーリングリストに入ります」とメールを下さい。

環KAN学GAKU

エネルギー その四

三段峡と電源開発 の巻

昔の新聞記事を読むのはとても勉強になる。学校の歴史の授業で習うのは、テスト用の、後の世になつてからの呼び名だけ切り取った「かけら」ではないが、新聞記事からは、そのときの生の空気とそれを伝えようとする者の「意図」がぶんぶん臭つて来る。第二次大戦後の太田川の発電所建設を中心に、記事や資料をめくってみた。

発電所建設は昭和20年代後半から集中して行われている。そのきっかけは、朝鮮戦争による「特需」のよつだ。25年の朝鮮戦争勃発を境に、中国地方でもそれまで停滞していた工業生産が急激に増えている。朝鮮戦争の少し前から、アメリカソ連を極とした「冷たい戦争」の始まりとともに、占領軍の意向が、日本の経済力を弱体化させ民主化させるこ

ている。

こうした背景のもと、太田川流域でも「生産県構想」の発表や「芸北特定地域総合開発」の指定が行われ、これらの中で太田川の電源開発が重い位置付けをされたことが、いまに至る流域の運命を決定付けることになった。筆者は政治的なことはあまり好きではないのだが、「どついつぶつにして太田川のいまが出来る上がったか」を考えるには、どうしても避けて通ることのできない問題のよつだ。日本が不当な支配を続けていたお隣の国で起こった戦争を、いまの広島の「繁栄」の「土台」にしていることは、ごまかしようのない事実だ。

ところで、当時の記事で一番よく出てきたのが、樽床ダム建設の問題と、三段峡のことだ。樽床ダムという「聖湖」とも呼ばれるダム湖の周辺には別荘地やキャンプ場があり、若い世代には「遊ぶところ」というイメージしかない。しかし、樽床ダムができる前は、現在の「湖底」にも集落があつて、大地に溶け込んだ暮らしが営々と続けられていた。

ここには大正（明治という説もあるらしい）以来

とから反共産圏の防壁とするために経済拡大を促進するという方向に変わってきたことが、そもその始まりになるのだから。昭和27年には「電源開発促進法」も公布され

電源開発のためのダム建設の計画があつて、水没させられることになる樽床地区の方々は、「死に勝る苦痛を与える」、「基本的人権を全く無視される」として、一貫して反対の姿勢をとられてきた。



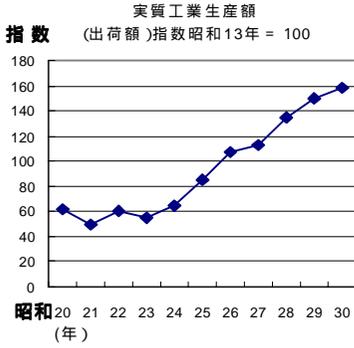
昭和29年5月19日付

中国新聞朝刊より

中国新聞社提供

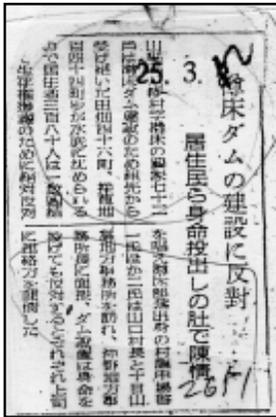
（この記事の中に、「建設、通産両省から水利権の認可をしてきた」との記述がある）

しかし、昭和20年代後半に入り、電力会社と行政が一体となった説得・切り崩しが強まり、測量が強行され（流血の惨事もあったという）、樽床地区の反対のまま県知事による事業認定が行われ、「既成事実」による地区の動揺を突いて電力会社は攻勢をかけた。結局三十年を超える闘いの後、昭和31年にダム建設が正式に決定したが、樽床の方々の苦しみはそれで終わったわけではなかった。

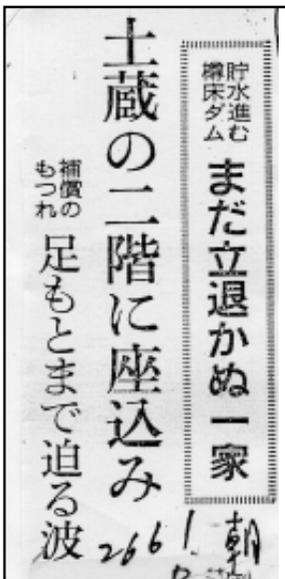


戦後の中国地方の工業生産の推移

「工業統計50年」より作図



昭和25年3月8日付
中国新聞朝刊より
中国新聞社提供



昭和32年9月19日付
中国新聞朝刊より
中国新聞社提供

いま「聖湖」は観光地で、広島から多くの人が、当時のことを知ってか知らずか遊びに行っている。自分たちが電気を使うために何百年にわたって育まれた地域社会を壊し、さらにその上に出来た湖で遊ぶ、なんか恐ろしくなってきた。環境への影響とか以前に、いまこの文章を打ち込むのにも使っている電気というものがどれだけの理不尽ともいえる犠牲を払って作られているのか、そしてそのことに普段全く無頓着でいられるとはどういうことなのか、ダムの問題とはそういうことではないだろうか。

ちなみに環境への影響でいえば、樽床のすぐ下流は三段峡で、やはりダム・発電所の建設に際して、三段峡の美観が壊されるといふ反対意見が、地元だけでなく文化財保護委員会などからも出された。紆余曲折を経て、いまふうに言えば「環境に十分に配慮する」形で建設が行われたが、結果はこの記事の通りである。この問題は技術的な改良で「解決」されたことになっているが、一度壊れたものは元には戻らない。筆者は小学生の頃（今から三十年近く前）に三段峡に紅葉狩りに行って、「こがなあええ眺めもあるんか」と感激したものが、横にいたお袋が、「三段峡も樽床ダムができてだめになつたねえ」とつぶやいていたのをはっきり覚えてる。

それにしても気持ち悪いのは、当時の新聞記事や資料からは、ダム建設に反対する樽床の方々に対して、「みんなのためだ、補償もたっぷりあるから我慢しろ」という論調が見え隠れしていて、ある資料では反対運動のことを「抵抗」と上から見下ろすような表現すら使われている。筆者らが疑うことなく受け入れている、なにげない日常の血となり肉となつている、戦後の「民主主義」とか、「復興」というものは何だったんだらうか、とても後ろ暗い気持ちになつてきた。でもそんなことを言うと、ど

こから、「あのころの貧しさ、苦勞を知らん者に何が言えるか!」、という声が聞こえてきそうだが。

(続)
水本 清隆

引用文献… 中国新聞
昭和25年3月8日付朝刊 昭和29年5月19日付朝刊
昭和32年9月19日付朝刊 昭和35年7月30日付朝刊
戸河内町史 通史編(下) 戸河内町 平成13年
八幡村史 芸北町役場 昭和51年
中国地方電気事業史 中国電力 昭和49年
通産省 工業統計50年

三段峡の清流なし 濁る水

悪臭放ち濁る水 川底も茶かつ色・魚浮く

ダムの腐水放出が原因

水本清隆

中国地方の清流は、山陽地方に多く、三段峡の清流は、その清流の代表として知られていた。ところが、この清流が、最近、悪臭を放ち、濁り、川底も茶色になり、魚も浮くようになった。これは、三段峡のダムが、腐水を放出しているためである。この腐水は、ダムの上流に、水が溜まり、腐敗している。この腐水が、ダムから放出されると、清流は、濁り、悪臭を放ち、川底も茶色になり、魚も浮くようになる。これは、三段峡のダムが、腐水を放出しているためである。

（後略）

昭和35年7月30日付
中国新聞朝刊より
中国新聞社提供

みずべのとしよかん 広島県の植物方言と民俗

渡辺 泰邦著

(シンセイアート出版、2001年)



渡辺 泰邦さんは、四十年来をこえる植物研究者としてのフィールドワークの傍ら、地域の植物方言

や植物に関わる民俗を記録してこられた。

かつて植物と人の暮らしはお互いに溶け合って存在し、方言は両者の関わり合いを生き生きと表現してきたが、多くの植物の消滅や希少化と表裏の形で、方言や民俗は忘れ去られようとしている。本書は、『自然史』は、地域の風土が育んだ民俗を抜きにして、決して語ることはできない」という渡辺さんの揺るぎない信念のもとに、消えゆく県内の植物方言や民俗を可能な限り詳細に後世に伝えるべく、編集された。方言や民俗の伝承は、私たちが自然との共生関係を取り戻していくための貴重な手がかり、足がかりとなるだろう。

たとえば、畦道の秋の女王「ヒガンバナ(彼岸花)」。ヒガンバナは、日本で一番方言名の多い植物らしい。記者が育った広島市安佐南区沼田町伴では、その汁を浴びるとかぶれると言って、「カブレソウ」と呼んでいた。あなたのところではいかが？ (哲)

「広島県の植物方言と民俗」は、自費出版です。比婆科学教育振興会に注文されれば発送されます。事務局 TEL・FAX 0824723234 (千部限定出版で、残部は少ないです)

「環・太田川」より

INFORMATION

パソコンのご提供、感謝です。

「環・太田川」若苗号で、「久地北・太田川げんき村」さんがパソコンを探しておられることをお知らせしたところ、すぐに、「うちにもあるで」と快く提供を申し出てくださった方がいらっしやいました。心より感謝致します。これからも、もし用済みのパソコンがございましたら、「ご連絡ください。よろしくお願い致します。」

石垣見学のレポート作成が遅れています。

さる6月17日に行った「山県石工の足跡をたどる」ミニツアーのレポートを、今月号の別冊にする予定でしたが、編集作業が間に合いませんでした。ごめんなさい。もう少し時間をください。

みんなで発送作業しませんか。

毎月第二土曜日に、広島市ボランティア総合支援センターで出来上がった「環・太田川」の発送作業をしています。いままでは二、三人で淋しくやってきました。やっぱりわいわいがやがや、たくさんで作業した方が楽しい！ぜひのぞいてみてください。朝10時ごろからやっています。参加して下さる方は、時間等変更があるかもしれないので、当事務局に必ず事前のお問い合わせをお願い致します。

編集後記

表紙の写真を提供していただいた滝口さんの話を聞いて、いつも見なれている太田川の中州がたいへんきびしい風景に見えてきた。あの砂地の中にはまだ遺骨が埋まっているかも知れないという。めぐり来る8・6に思いを新たに…… (幸田)

暑い、暑すぎる。夕刊を配つとると、バイクのシートが焼けてケツがやけどしそうじゃ。水不足とかならんよ、節水しようで。 (哲)

「環・太田川」定期購読会員
になりませんか？
一般定期購読会費は、
年間3,000円です。

月刊誌購読のほかにイベントや学習会の参加が無料になる賛助会員(年間5,000円)「環・太田川」の活動をさらに積極的に支援して頂く維持会員(年間10,000円)もご紹介します。会費のお振込みは、郵便振替口座 01390-6-20356

「環・太田川」事務局へ
お問い合わせは 左記「環・太田川」編集会議住所・電話番号へお願い致します。パンフレットを送らせて頂きます。

「環・太田川」若苗号(月刊)
2001.08.10 発行
(第四号)

「環・太田川」編集会議発行

〒733-0852

広島市西区鈴が峰町40-8-202

原 哲之 方

Tel・Fax 082-278-1044

HPアドレス:

http://hiroshima.cool.ne.jp/kan_ootagawa/

年間購読 3,000円
一部 300円